

# 母親

文學士下田次郎

此頃の婦人は、美しい若い妻たらんことを願ふて、所謂慈母たることを願ふ心掛は無くもなからうが、是れから新家庭を組織しやうとする若い婦人の考は、是れから新家庭を組織しやうとする若い婦人の考は、兎角前者即ち美妻主義であつて後者の良妻慈母と云ふ考へは薄くはなからうかと思はれる。凡そ未婚者にあれ既婚者にあれ、良妻たると同時に慈母たる考へは終始其の念頭を去つてはならぬもので、家事とか經濟とか云はずもがなのことと、新時代に活動せんとする小供が生れたならば、斯く駆け斯く教育せんと云ふことを考へ置かざるべからず、即ち母親として世間に耻づるところ有つてはならないのである。

元來、今までの親の多くは子供の教育は學校でやつてくれるものと云ふ觀念があるから、小供の學齡に達する迄は勿論、其の就學後に於ても矢張り同様の考へで、唯親は小供を學校にやる義務のあるもの父學校へさへやつて置けば世間普通の人間に成れるものと考へて居るのが多かつた、否現在も尚多いのである、勿論小供の教育は家庭と學校の兩者に因つて始めて完き者たるを得るのであるから、此點は大いに考慮を要するものと信ずるのである、然し現今は大抵此の位のことは承知はして居るものゝ、實際母親として其の小供を取り扱ふ時は如何あらうか、餘程考へないと理想通りには行かないものである。

先づ第一は胎内教育である、三歳児の魂百までといふ説がある、子供は胎内から既に母親の感化を受けて居るもので、母親の思ふことと言ふこと爲すこととは悉く小供に感化を及ぼすものである、其の感化の力が如何様にせねばならぬか、實際の経験其の他自分が見聞した事に就て之を説明する。

世の進化と共に一般の男女が、勞働は神聖であると云ふ考へが盛んになつて来たのは喜ぶべき現象であるけれども、妙齡の婦女子などが、其の理想的に就ての考へは、悉く着實なる社會的觀より割出される者は頗る稀にして、大概は社會の誰れ

も希望する體裁の良きものを撰ぶのが普通であるが、茲に特例なる女髪結理想の女學生がある、これは自分が奉職して居る某女學校で生徒の理想希望目的若くは何になりたいとかと云様な事に就て夫々の思ふ處を書いて出させた事がある、處がやれ誰の様な豪い婦人にになりたいとか何の誰の様な人に嫁ぎたいとか種々難多な目的希望理想を認めて出された、其の中で最も私の注意を惹いたのは女髪結になりたいと認めてあつた一生徒の答である、婦人が女髪結になりたいと云つたからとて別に不思議はない、然しこうは稍々家の貧しいものとか下層に居る婦人が希望して居る處で、良家の子女や富豪の令嬢であつて之を望むで居るとしたなら、大に不思議であると謂はねばならぬ、私に女髪結になりたいと答へたのは良家の子女であつた、富豪で而も社會に地位名望のある人の令嬢であつた、其の様な家の令嬢が女髪結を希望しに就ては何故貴嬢は女髪結を希望しますかと反問せずには居られない。此の女學生が女髪結になりたいと答へたのは、

其の母親の言が動機となつたので其の女學生の謂ふ處に依れば斯うである、自分は女髪結は婦人の髪を賃金を取つて結つてやる仕事であると云ふ事の外には、挑削を何うして結ぶか何すれば丸畠が出来るかは知らぬけれど、何日ぞやお母さんが下女に女髪結と云ふ商業は實に善い仕事だ少しは急がしいけれども非常にお金が取れる、女としてはあんな善い商業はあるまいと話して居られるのを聞いたので、お母さんが善いと謂はれる商業ですから女髪結と云ふものは悪い商業ではない、金の取れる善い商業であらう、善い商業なら私もなりたいものだと思ふてさう書きましたとの答へであった。

總て児供は親の云ふことは何でも善いものと決めて居る、親のすることは何んでも眞似て差支ないものと思つて居るのである、殊に母親は最も多く其の子女に接して居るものであるから其の一言一舉の末といへども尙も児供に聞かせて悪いこと真似சとして善くないことは大に慎むべきことである、一寸聽けばつまらない話の様だが深く研究

するこ之れは母親の心得として非常に大切なも  
のである、夫れを児供の邊に居るのにも拘らず其  
の親は世間の宜しからざる評判を爲すとか或は児  
供に見せて宜しからざる行爲をなすとかして却つ  
て児供には斯ることは云ふてはならぬ爲てはなら  
ぬとか云ふのはよく世間に有る例なれど、児供は  
其の時こそは言ひもせず行ひもしないとして安心  
して居ると大間違、いつか児供の脳裏に其の親の  
言行が浸み込んで居て其の児供の言行となりて現  
はるゝか或はそれが全く児供の第二天性として成  
人の後惡しき言行となりて現はるゝのであるか  
ら、之れを輕々しく考へては児童教育上に非常な  
悪影響を與ふるものである母親たるものは餘程  
此の點に留意して貰はなければならぬ、彼の孟子  
の母が孟子を育てる時に非常の苦心をした事は人  
口に膚次して居る「孟母三遷」の話で在るが、實に  
此細の事の様で且つあまり世間に知られない話が  
まだ澤山ある。

に悪人でも無理非道の奴でも其の母親からの教訓その母親に就いての話を聞いて、悔い改めぬものはあるまいといふのである。

國民教育の源泉は母親であると、佛蘭西のナポレオン皇帝は謂つて居る、「先づ母を教育せよ。然らば國民は自ら教育せられん」と、總て男子は外にあつて働き子は内にあつて家庭の處理をして居るので、一見母は社會に現はれぬ様に思はれるが實際に於ては其子が母を代表して社會に顯はれて居るので、子供及び母の子たる總ての人間が社會で行つて居る總ての事は即ち母を代表して行つて居るのである、日本では子供が悪い事をすると親の娘が悪いからだと云ふが、全く其の通りで賢い母を有つた子は賢いとして社會に出ては善行が多いい、之れに反して悪い母によつて養成された子供は社會に出て悪い事をする馬鹿な事をする子供悪い事をする子供は皆其母がこれを賢く且つ善く躰けなかつた罪であつて、ナボレオンの謂ふ處は實に動かす事の出來ぬ格言疑ふ餘地のない眞理である。

茲に母親の精神教育としての實例がある、私の女學校にある年成績優等で入學した一人の女生徒があつたが、其の年其の女生徒が東國の鄉里に休暇で歸省した處、其母——父はもう死亡して家族は母親と二人暮しである——は、非常に喜んで成績優等で其の目的の學校に入學したのを喜んで呉れる、娘は久しう振りに母に逢つたのが懐かしい餘り悦し涙を流したのであるが、ひよつと母の足を見るに兩足の足の爪が皆脱けて仕舞つて居るので、娘は大に驚いて其の譯を尋ねた處、「其の母は別にさう驚かなくともよい、これはお前が四月東京に試験を行つた時、どうか試験が無事に通る様にと、毎朝——早く霜の朝雪の夕を鎮守の神様に跣走參りをしたため、凍傷を起してこんなに爪が脱けたのだがナニお前のためにこれ位は何んでもない、お前の試験が優等で通つたと云ふ手紙がお前から届いた時に私は悦し泣きに泣きました、そして直様神様に御禮詣をしたとの話に娘は母の慈愛に感泣したのであつた。

此の母にして此の娘ありで、其の後其の娘は常

に心に胸に母の事を深く刻で、一生懸命に勉強したがお母さん一人なのに莫大の學資を送つて貰つて済まぬと思つたので、學資は半分でよい其の残りでお母さんが甘いものでも上つて下さいと云つて遣つた處、賢いそして娘思ひの其母は折返して娘に下紙を出し自分はお前の成長すること、早く學校を優等で卒業して立派な婦人になることを樂みにして居るので、お前のために苦勞して居るのは決して苦勞とは思はぬ、學資の事などは心配せず又私の身の上を思つて呉れるのは難有いが其の隙に書物の一頁でも多くを讀んで、早く立派な婦人になつて呉れとの戒に、娘は毎晩日々母の深い慈愛に感謝の意を表する温い涙を以て眼を霧し乍ら勉強したため、兎角若い婦人の陥り易い誘惑に打勝ち目出度優等で學校を卒業した、斯かる實例を擧げて説話する時は、或婦人の中には此の文明の世に、なんば愛娘のためとはいゝ冬の朝霜まで跣足で踏んで神參りをしてそしてその娘を慰まさすとも、精神教育の仕方は外にも有る、餘り馬鹿氣て居るとハイカラ流の攻撃はあるかは知ら

ねども、之れは一つの實例であつて母一人娘一人の場合には隨分同情を表すべき事柄である、それでは其攻撃をする人にどれ丈の精神教育が有りどれ丈の熱心が有つて、完全に女子教育有終の矢を收むることが出来るかと云ふに、所謂其の言行は一致せずして黃に學校の門戸を飛出したと云ふのみで、一向社會の實用に適する婦女子はないのである、つまり生意氣の婦女子が澤山出來上るのである、此等は學校教育の任に在るもの、大に留意すべき事なども、矢張家庭に於ける母親の慈愛を含める熱心なる精神的訓戒はかかる場合に非常なる好果を來すものなるを以て、母親たる者は亦子女教育上常に浮薄ならざる觀念を鼓吹することが肝要である。

惡女も子には賢母である、總て女は妻になつた時が修業の門に入つた時で、子を産んで母となつた時が卒業の時である世の中には隨分外面如菩薩内心如夜叉と云ふ様な悪い女排斥すべき女亂倫の女は非常に多い、然し母としての女には排斥すべきものは非常に珍ひ、母として子に對する女は皆

善人である。如何に悪い女でも子に對して善人とならぬものはない即ちこれが道徳上母の修養で子に對する母の心得を常に持して居るものは善人で且つ正しい婦人である。

よくある事だが、或母親が自分の家の児供が隣家の児供と喧嘩をして終に双方が泣き出すると、其親達が出来る児供の争ひは親の争ひとなりそれから家同士が相反目する事が有るがつまり之は其の親達は各自の児供が可愛といふ念あるため其児供の行為の是非善悪を判別する遠なく、何でも自分の児供は善いとするから起るものである、かかる事は重に下層社會にありがちの事ながら、親たるものは此の場合に自分の児供の行為の善悪を判別し若し自分の児供が惡しければ充分之を膺し、若し惡しくとも喧嘩は悪き者として自分の児供を責めざる可らず、假りにも惡しき行爲ありし自分児供を庇護するは絶対に注意しなければならぬことである。

然し婦人は愛憎の變化の多いものであることは事實で、其の爲め児供を損ふ事が尠くない、一體

に婦人は何うしても神經質の者が多いから、其の児供を躊躇する上に自然愛憎心の加減に依りて天性善良の児供もいやに神經質のヒネクレたる児供と成ることあり、深く考へなければならぬ事である。母親が何か氣嫌の悪い時に其児供が善い行をしても、却つて母親は之れを賞すに自分の怒りを移すために、児供を強く叱つたり、是れと反対に児供が悪い事をしても何か母親自身の心中に嬉しい事があつた時は之を寛宥したりすることがあるので、一寸児供心には其母親が持つて居る善惡の標準を定めることが出来ず、善い事をしても叱られるならと云ふ様になつて、つい／＼母親の云ふ事や命令も聽かなくなる事があるから、愛憎の甚しい變化は母親として最も注意すべきである、茲に附加へて言ふて置きたい事は、一家之内には兄弟あり姊妹あり其兄弟姊妹には母親に對して繼母子の關係あるものも有つて、斯る家庭に於ては其の母子の間柄は隨分面倒至極のが有つてお家騒動などは皆こういふ關係から起つたのである、それで有るから其間に處するは親の児供に

對する氣配りは容易ならぬもので有つて、其母親たるもの、精神教育が充分出来て居らない婦人であつたならば實際此場合の児供の教育は完全を望むんでも不可能である。要するに斯る場合の児供の躾け方は一般的の児供に對する愛の平等であるのは最も肝要であろうと信するのである、其繼子に對しては一層深き注意を以てこれに望み繼子をして實際の生母と異なる感ながらしめる様しなければならないのである、其兄弟姉妹が同母子で有る場合でも、世間にには甲を愛して乙を憎むと云ふやうな事を耳にすれども、之れそんな片寄りたる事の有る可き筈なければ、何處までも愛の平等を保たねばならぬものである、これは母親の愛憎心の變化の甚しきものなどにはまゝ有りがちの事であると思ふから、特に附加へて世の母親たるべき婦人の注意を希望するのである。

子を思ふ母の心は聞くと云ふ事が有る、古歌に「人の親の心は聞くに有らねども子を思ふ聞くに迷ひぬるかな」と云ふのがあるが、實際如何なる賢婦人でも子のために種々迷の闇に入る事が多い、児供を對する氣配りは容易ならぬもので有つて、其母親たるもの、精神教育が充分出来て居らない婦人であつたならば實際此場合の児供の教育は完全を望むんでも不可能である。要するに斯る場合の児供の躾け方は一般的の児供に對する愛の平等であるのは最も肝要であろうと信するのである、其繼子に對しては一層深き注意を以てこれに望み繼子をして實際の生母と異なる感ながらしめる様しなければならないのである、其兄弟姉妹が同母子で有る場合でも、世間にには甲を愛して乙を憎むと云ふやうな事を耳にすれども、之れそんな片寄りたる事の有る可き筈なければ、何處までも愛の平等を保たねばならぬものである、これは母親の愛憎心の變化の甚しきものなどにはまゝ有りがちの事であると思ふから、特に附加へて世の母親たるべき婦人の注意を希望するのである。

甘やかすと云ふのもそれで、児供に對して場合によつて適當に勸善の正しい方法を取らねばならぬ、甘い子が出来るのは児供の罪ではなく甘い親の罪である、子を育てるのに甘くするの家を建てる時に楔を打なかつた様なもので、如何に外觀は立派な家でも楔がなければ何時か暴風のため崩壊する、児供も矢張りそれと同じである、又児供が親を侮ると云ふ事は世間によくある事だが、是も矢張母親が悪いのである、然し斯いふ母親がよく有る、それは頗る八ヶ間敷始人で何でも児供を躾けるには放任主義ではならぬビシ々々小言を言はなければ児供の躾けは出來ないものだと考へ、箸の上げ下しにも小言を言ふ、児供はビリ々々すがその母親の眼の前でこそ言ふ事を守るもの、母の見えない處では一向守らない、つまり小言は慣れっことなりて其の児供はだん／＼成長するに従ひ不貞者となる、親は益々小言を言ひ愈々之を憎み出す最も最早躾けの好時機を失したもので、始めから抑もの教育が間違つて居つたので悔いても及ばないのである、児供の訓戒はよく程度

と方法とを考えへなければならぬもので、有つて、隨分世間には天性善良の児供で、然も身體の壯健なりし者が、前の様なる八ヶ間敷き神經質の母親に鍛けられたため、品性の不良に變化したるのみならず、身體も非常なる病身となつて成長の様社會の活動場裏には到底仲間入りの出来ない様な片輪者とすることがある、是れ皆其母親たるものゝ鍛け方の善惡如何に因るものであるから、大いなる注意を拂つて其児供に望まねばならぬものである。

世の進歩すると同時に其母親の心掛も亦それ丈進まねばならぬ。世間では千萬金の財産を遺すのを唯一の願と考へて居るものもあるが、眞の遺産は千萬と數へて得可き物質的の財産ではなくて立派な児供を社會に遺すことである。貴婦人や虚榮の強い凡ての人は互に立派の衣裝高價な指輪時計等の競争に熱中して居るが是れは母親としての務から謂へば末の末である。第一の競争は立派な児供を育てる事である。母たるものは世の進歩するものであることを常に心に忘れず、從つて児供は自分より進歩したものに育てねばならぬと云ふこ

とをよく念頭に置かねばならぬ。これが母親の責任であると同時に母親に採つて第一の慰安である。

## 三越呉服店に於ける 玩具展覽會を觀る

白山生

去月一日より三越呉服店内に開催せられたる玩具展覽會は近來に珍らしく教育的な展覽會であつた。我輩も忙間を踰みて一日之を參觀して種々なる利益を得た。因つて其感想の概要を他方の會員に御報告申すとしやう。  
さて此展覽會は大體二部に別れて居つて一部は展覽會（同時に即賣もする）と一部は参考部となつて居る。先づ展覽部の方から見やうと思つて入口を入つたのが去月中旬火曜日の午前九時頃であつた。入口を入つて左に折れて二階への階段を中途